

2014(仏暦2557)年 春 4月号 (第90号)

# 万行寺寺報

Mangyoji Jihō

発行

浄土真宗本願寺派

万行寺 山崎信充

〒385-0003

長野県佐久市下平尾 4 6 1 - 1

電話 0267-67-2460



## ■住職法話

仏事の食事 "お斎"<sup>とき</sup>

## ■～結ぶ絆から、広がるご縁へ～ ごえん

## ■本願寺の本

「いまを生かされて」大谷光真 著

## ■編集後記

## Photo

佐久地域の桜は4月下旬頃に満開になりました。今年は、天気が荒れることも無いようで、花持ちが良く長く楽しめそうです。お弁当を持って出かけてきました。

# 住職 法話

## 仏事の食事 “お齋”

佐久地域では、仏事の時の食事を「灰寄はいよせ」と、独特な言い方が広まっていますが、全国的には「お齋とき」と言われています。この『齋』の謂いわは諸説あるようですが、『齋』という字にならって「凸凹こぼれが無く等しくそろっている。そろえる。ととのえる。」と言った意味があり、故人を縁ゆかりに集あったものが、等しく同じ食事を頂き、同じ身となり血となることであると聞いたことがあります。

話しは変わりますが、先月で終わったNHKの朝ドラは「ごちそうさん」と言います。毎日観るのは大変ですが、このドラマは最初からはまって

録画もしながら欠かさずに観ました。内容は、先の大戦前から始まり、戦中、戦後と激動の世を生きた女性が主人公で、渡辺謙の娘の杏あんさんが演じていました。とにかく自分が食べることはもとより、人にも美味しいものを作って「ごちそうさん」という笑顔をみるこ

とが大好きな女性です。食を通して様々な事を考えさせられるドラマで、なかでも随所ずいしよに出てくる「見えないものによつて生かされている」という台詞は仏教に通ずるところがあり惹かれました。その中でも特に印象的だったシーンは、母として戦死し

た次男のお葬式をする場面でした。母に似て、食べることや料理を作ることが好きな次男は、海軍の船中のコックになるうと自ら兵に志願し出兵しますが、後に戦死の知らせが母のもとに届きます。出兵を反対しておけばという後悔と、いつか帰ってくるのではという思いの中で、なかなか子供のお葬式が出来ずにいたところへ子供の遺品が届きます。それは、夢の中に出てきた自分が好きな食べ物が沢山書かれたノートでした。それを機に、子供のお葬式をしようとして決意します。

それは、お骨などあるわけでもなく、家族など縁者が一

同に食卓に会し、ノートに書かれた好きな料理ばかりを並べて、ともにいただくという質素なものでした。それは戦後の食糧難のなかでは精一杯の事でした。食事をしながら、「おかげで、こんなご馳走いだけだ。本当に幸せ…」といった台詞がありました。まさに「お齋」そのものです。

「お齋」とは、単に飲食をして労働ねがいや会などではありませんが、故人はもとより、あらゆる方々のおかげによつてご馳走をいただけていることに感謝し、見えないものによつて生かされていることにあらためて気付かされる集まりが「お齋」なのでしょう。



～結ぶ絆から、広がるご縁へ～

# ごえん

## ②「ごえん」わたしたちが自覚する以前から、つながっています。

「袖振り合うも多生の縁」という言葉があります。「多生」を「多少」と書き間違える人もいますが、「多生」でなければ、この言葉の正しい意味にはなりません。往来で行き交う人の着物の袖先が、軽く接するようなささやかな関係であっても、何度も生まれ変わる中で生じた貴重な縁であることを意味しています。

しかし、長い時間の中で育まれたご縁であることを意識することは、なかなか難しいことです。直接的な原因について思いをめぐらすことはできても、遠い過去からの原因を自覚し続けることは本当に困難です。

親鸞聖人は、『教行信証』（親鸞聖人の主著）の「総序」で、

ああ、弘誓の強縁、多生にも値ひがたく、真実の浄信、億劫にも獲がたし。

たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。

と仰っています。阿弥陀さまからの願いである大いなる本願は、いくたび生を重ねてもあえるものではなく、まことの信心はどれだけ時を経ても得ることは難しい。思いがけず、真実の行と信を得たなら、遠い過去から、阿弥陀さまの光が、育み続けてくれていたご縁を感謝しよろこぶべきであると、親鸞聖人はお示しくださっています。

私たちは、心配し続けてくれている人、願い続けてくれている人がいても、当たり前のようにそのことに気付かなかったり、ついつい忘れてしまったりしています。そうした縁が途切れた時、心配してくれていた人がいなくなった時に、やっと、その大切さに気付くということも少なくありません。

阿弥陀さまの光明は、私たちの気付かない遠い過去から、すべての人々を照らし続けています。そのことが、貴重なご縁となって、今、救いに出あっているのです。

## ～本願寺の本～

## いまを生かされて



和讃とは苦悩する人々への、  
励ましなのです。

さあ、ご一緒にいただき、  
味わってまいりましょう。

浄土真宗本願寺派第24代門主

大谷光真 著

親鸞聖人は、生涯に500余りの和讃を残しました。なかでも『浄土和讃』と『高僧和讃』は76歳、『正像末和讃』は85歳のときの成立で、88歳まで加筆・補正を続けられました。

晩年を迎えた親鸞聖人は、和讃を通して、共に生き、悩み、苦しみ、立ち尽くす人々に向かって、「私も同じ苦悩するものだ。しかし嘆くことはない。仏の温かなまなざしに気づいたなら、必ず人生は転換される」と語りかけています。

「三帖和讃」から62首を選ばれ、わかりやすい言葉で意識。親鸞聖人のおこころをたずねられ、現代人の課題などを通して、自他ともに心豊かに生きることとは何かを問われている。

大谷光真ご門主の、浄土真宗本願寺派門主としてご在任中最後のご著作。(本願寺出版社HPより)

## 編集後記

昨年から寺報の発行が滞ってしまいました。申し訳ございません。何かとご迷惑おかけ致しております。月毎の発行から、しばらく季刊(年四回)にて変更をさせていただきます。また、前号からの「くらしの仏教語豆事典」は、「ごえん」の連載が終わり次第再開と致します。◆寺報の編集も久しぶりにさせていただきますと、「本願寺の本」に載せる新刊の情報も様変わりしています。今回は、ご門主の本のみでしたが、今後はいくつか紹介していこうと思っております。

